

アメリカ学会海外渡航奨励金 報告書

相川 裕亮（金城学院大学）

アメリカ学会海外渡航奨励金の助成を受け、アメリカ合衆国サンディエゴで開催された American Academy of Religion (AAR) の年次大会に参加した。

報告者は、現地時間 11 月 24 日（日）午後で開催された Japanese Religions Unit の “Alternative Perspectives on Japanese Religious History” のパネルに参加し、“Billy Graham’s Crusades in Japan: Analyzing Non-Religious Newspaper Coverage and its Implications for U.S.-Japan Relations” というタイトルで研究報告を行った。

報告では、アメリカの福音伝道者ビリー・グラハム（Billy Graham）を日本の非宗教メディアがどのように報道したのかを明らかにした。

グラハムは米キリスト教、福音派の指導者である。アメリカ国内外で伝道集会を開催し、支持を集めた。加えて、米政府と伝道集会の開催地の政府とをつなぐ「民間の外交官」として活躍した。先行研究においても、英・西独伝道と現地起業家との関係、韓国伝道と朴正熙政権の関係が分析されてきた。また日本の伝道集会に関しても、グラハムの 1967 年伝道集会に関する分析がなされてきた。しかし、グラハムはそれ以後も日本で伝道集会を開催している。またグラハムの伝道集会が日本社会そのものに与えた影響も十分に明らかにされてこなかった。本報告では、複数の新聞のデータベースを用いて、「グラハム」が日本でどのように報じられてきたかを明らかにした。

分析の結果、各新聞社は、1950、60 年代にはグラハムに関する論考を神学者に依頼し、グラハムや伝道集会に関する記事を掲載した。他方、1970 年以降、各新聞社はグラハムに関する記事を掲載するものの、記事の件数は減少したし、記事の長さ自体も短くなった。加えて、それらの記事は、グラハムと大統領との関係や北朝鮮訪問といった彼の政治・外交的な側面に注目するようになった。報告内ではグラハムの報じ方の変遷理由を、日本社会における米政治への関心、北朝鮮への関心という 2 つの観点から論じた。

上述の報告に対して、ほかの宗教家の訪日をメディアはどう報道したのか、各新聞が持つイデオロギーをどう考えるのか、地方紙はグラハム訪日をどう報道したのか、新聞の分析は日本世論をどれくらい反映しているのか、世俗化をどう考えるのか、などの質問を受けた。

研究報告に加え、International Scholars Reception に参加した。そこで各国から集まった宗教学者や歴史学者と交流をすることが出来た。

サンディエゴで開催された AAR にて研究報告を行い、研究者の交わりに参加できたのは、アメリカ学会海外渡航奨励金のおかげである。感謝申し上げる。

報告書

このたび「アメリカ学会海外渡航奨励金」の助成を受け、2025年6月16日から19日にかけてアメリカ合衆国コネチカット州の University of Connecticut, Avery Point にて開催された Oceanic Melville: Fourteenth International Melville Society Conference に参加いたしました。

本学会は、19世紀アメリカ文学を代表する作家のひとりであるハーマン・メルヴィルに関する研究者が世界中から集まる国際学会です。メルヴィルの作品を政治・思想・文化・歴史など様々な観点から読み解くセッションが多数開催され、国際的な研究交流の場としても非常に意義深いものでした。期間中は代表作 *Moby Dick* に触発されたアート展示、演劇の鑑賞をする機会があり、18日のエクスカーションでは Mystic Seaport Museum での捕鯨船 Charles W. Morgan 号の見学や捕鯨ボートの実演に触れ、メルヴィル作品における様々なモチーフを多角的な視点から感じられる機会もありました。

私は6月18日に行われたパネル「Poetics/Politics of Maritime Labor」において、「Is the Master-at-Arms Equivocal?: Claggart's Malfunction in *Billy Budd*」というタイトルで発表を行いました。本発表では、メルヴィルの遺作 *Billy Budd, Sailor* に登場する「武器係曹長」クラガートの曖昧な言動に焦点を当て、彼の内的矛盾によって彼が死へと至る過程を論じました。クラガートの曖昧性（equivocality）が彼自身の破滅を導く要因となる、という解釈を中心にしてテキストを精読した結果を発表できたと感じています。発表後の質疑応答では、「クラガートの曖昧性こそが彼の死を招いたという指摘は非常に示唆的である」といったコメントを聴衆からいただき、自分の主張が伝わったことを実感する貴重な経験となりました。質疑の時間以外にも、自分の研究内容に引きつけた観点からのコメントを受け、フロアからの反応が今後の自らの研究の発展につながる実感を得ました。

また、印象に残った発表として、歴史学を専門とする研究者による *The Encantadas, or Enchanted Isles* および *Moby-Dick* に関する発表が挙げられます。発表者は「Life of mariners is defined by disenchantment. (船乗りの人生は覚醒・幻滅によって定義される)」と定義づけたうえで、海という空間においては disenchantment/enchantment、rational/romantic、physical/metaphysical の対立や衝突が頻発するという分析を展開しており、多くの刺激を受けました。

さらに、興味深く聴講したもののすべてを理解できずに終わったパネルの発表者と帰国後に連絡を取り、発表時に用いたメモや参考文献を共有していただく機会を得ました。些細な事ではありますが、このような研究交流ができたことはとても嬉しく、これが単発の出会いに留まらず、この機会を得た情報や人脈を自分の研究活動に取り入れ、積極的に生かしたいと思えた事が本学会参加の大きな成果の一つであったと感じています。

今回の学会参加を通じて、国際的なメルヴィル研究の場における日本人研究者の活躍を目の当たりにするとともに、発表準備段階から、自身の研究に対する姿勢や視点、方法論を見直す貴重な経験をしました。今後は、今回の発表内容をもとに発表内容の論文化を目指します。最後になりますが、このたびの貴重な助成に対し心より御礼申し上げます。

第14回国際メルヴィル学会は、2025年6月16日から19日、コネチカット大学エイヴリー・ポイント校にて開催された。大西洋を望む広大なキャンパスは、海洋小説家メルヴィルを研究する者たちが集うのにまさに理想的な空間であった。

本国際会議は、人類の活動が地球環境に与える影響力の質的变化が広く議論されるようになり、茫漠たる海洋と無垢なる水夫というロマン主義的な想像力とその正当性を失った現在、人新世やポストヒューマン、倫理や政治、環境批評といったさまざまな文脈のなかで、メルヴィルの海洋的想像力を今一度検討することを目的としていた。その参加者は多種多様で、紙の上のインクに向き合う研究者のみならず、ヴィジュアルアートの研究者や、航海者を育成する教育指導者も発表者に名を連ねていた。その多彩な顔ぶれが、メルヴィルという作家が今なお多くの探求者を惹きつけていることを裏付けているように思えた。

報告者は全部で33あるパネルの33番目の発表であり、“traceability”の概念を、メルヴィルの詩的想像力の観点から論じた。発表後はコネチカット大学の院生や彼の指導教官、そして現地に集うメルヴィル研究者から貴重なアイデアや感想をもらうことができた。

最終日に発表を控えながら、いくつもの刺激的な発表を見聞きして肌で感じたことは、北米における文学研究において、デジタル人文学がますます目覚ましく花開いていることであった。たとえば、メルヴィルが自身の蔵書の欄外に書き込んだ語彙をデータベース化し、そこにあらわれる感情を数値化し、その傾向分析を行うことで、作家の感受性や創作のプロセスを再考する試みなどだ。こうした手法は、テキストの精読を中心とした、究極的には人間の感性による文学研究に大きな挑戦を投げかけており、人文学全体の方法論的变化とどう向き合うかを考えさせられる機会となった。むしろ、我々はただトレンドに追従するのではなく、複数の手法のあいだに立ってインターディシプリンに思考し、アカデミックな営為を続ける必要があるのだろう。

大会プログラムの一環として訪れたミスティック・シーポート博物館では、19世紀に実際に使用された捕鯨船に乗り込み、当時の捕鯨船員と同じ作業を体験するという貴重な機会を得た。また、ホールで上演された“*Moby-Dick in Minutes*”では、地元の学生たちが、メルヴィルの原文のみを用いて、『白鯨』の長大な物語を35分に凝縮して演じ切ってみせた。中でもエイハブ船長役の演技は、彼の狂気の奥にある弱さと哀しみを見事に表現していたように思う。

これらの有意義な体験は、私にとって、JAASの渡航奨励金なしには経験不可能なものであった。現地では、本学会の会員である日本の研究者たちにも助けられた。今回の学会で得た知見、自身の発表を通じて受け取った反応を、今後のアメリカ研究に役立てていきたい。